

トピック TOPIC とびっく

流転の中流論

新情報センター前会長

本 多 良 樹

日本人一億総中流論がにぎわいを見せて30年になる。にぎわいのうちには毀誉褒貶さまざまであった。「中流」は、今でも思い出したように社会評論家の文中で引き合いに出されるが、いい意味合いで出されることは少ない。79年の国民生活白書は日本人の生活基盤の充実をうたったが、その背景のひとつに中流意識の定着がある、と説明した。世論調査で「中」が9割になったところである。このとき中流論が最も得意満面になったときでもある。だがしかし、と論点を懐疑の方向に持っていかないと識者諸先生の役割がつかまらない。それからしばらくは、やや大仰ないいかたをすれば、一流の学者先生から投書夫人にいたるまで侃々諤々（かんかんがくがく）、もしくは喧々囂々（けんけんごうごう）であった。中身がつかみ切れない中流物語の始まりである。

一億総中流の生みの親として2つの世論調査が寄与している。SSM調査と国民生活調査である。現在も継続実施されており、貴重なデータを提供している。いずれにしても、世論調査で「中」が飽和に達し動きがみえなくなると、中流論もしばらく鳴りをひそめた。00年になって2つの月刊誌が奇しくも同じ月に中流崩壊をテーマに特集を組み、肯定論と否定論を載せ、それを契機に久しぶりに甲論乙駁の

中流論が見られた。

世の中がバブル期をはさんで厚化粧を落とし素肌を見せるにいたって、「中流」意識調査の結果も世相に合わせ下方に向けた動きを見せた。成長神話としての中流ゲームは歴史的使命を終え、産業社会における階層モデルも力を失ったかに見えたが、IT革命の始まりで、新たに社会的不平等が拡大し、その結果姿を変えた資本家と労働者が生まれ、ふたたび階級社会の復活とその擁護論まであらわれ、今につづいている。

「中」の言葉をはさんで造語の氾濫がみられ、それを整理整頓するだけで骨がおれるが、それ以前の比較的分かりやすい階級論から、曖昧模糊とした中流論にいたる道筋は、だがしかし的展開を含め、けっして理解しやすいとはいえない。以下階層論の経過を整理をしてみた。（参考文献は小論の末尾に記した）

階級と階層

階級論は大戦前から欧米で著しい展開を見せたことは歴史教科書に載っているが、日本でも戦後の一時期真摯な論争が繰り広げられた。しかし、どちらかというと評論的でキーワードの乱立と体制告発に終始したともいわれる。戦前の日本にはまがりなりにも労働者・

農民、中産階級、資本家が存在し客観的に認識できたか、戦後の大衆社会論の展開で中間層、中間階級、中産階級から新中間階級などの用語の乱立がみられた。その過程では国勢調査や就業構造調査などの統計調査が検証のためのデータとして活用され、一方では「階級」という用語に抵抗を感じ、「階層」という言葉を採用する識者も増えた。やがて、それまでの社会階層論に異を唱えるものもあらわれ、社会階層は政治的な要因で生じるものであり、必ずしも高度成長により階層の動きを高めたとはいえない、とするものである。

そして、階層の研究は社会的な不平等の仕組みを明らかにすることであり、不平等の原因となる財産や社会的地位の継承、権力の分配などの構造を明らかにすることが必要だとされた。そのためには客観的なデータの収集と分析に裏付けられた科学的な社会階層論が必要とされたが、唯一それに一番近い存在としてSSM調査が注目をあびた。

SSM調査（SSM全国調査委員会）

SSMはSocial Stratification and Social Mobilityの略号で「社会階層と社会移動」調査といわれ、1955年に始まり10年ごとに実施されてきた。戦後欧米先進国で展開していた社会階層の研究に呼応して、日本でも52年にまず6大都市で行われ、65年に全国調査としてスタートした。調査の設計には社会学、統計学、心理学、教育学などの分野を網羅した学者が参画しており、以後時代に合わせて設計の変更も行われた。調査では階層意識や職

業移動など社会階層論に必要な質問項目は継続して含まれており、多くの研究者の拠りどころとなってきた。その中で直接階層帰属意識を聞く質問は次のとおりである。

問 [リスト] かりに現在の日本の社会全体を、この表にかいてあるように5つの層に分けるとすれば、あなた自身は、このどれに入ると思いますか。

1	上	4	中の下
2	中の上	5	下
3	中の中	9	DK・NA

変形の5段階であるが、85年の調査で「中の上」と「中の下」を合わせて9割に達した。ただし調査対象が65年と75年は男のみ、85年から男女となっており、集計はDK・NAを除いたものとなっている。

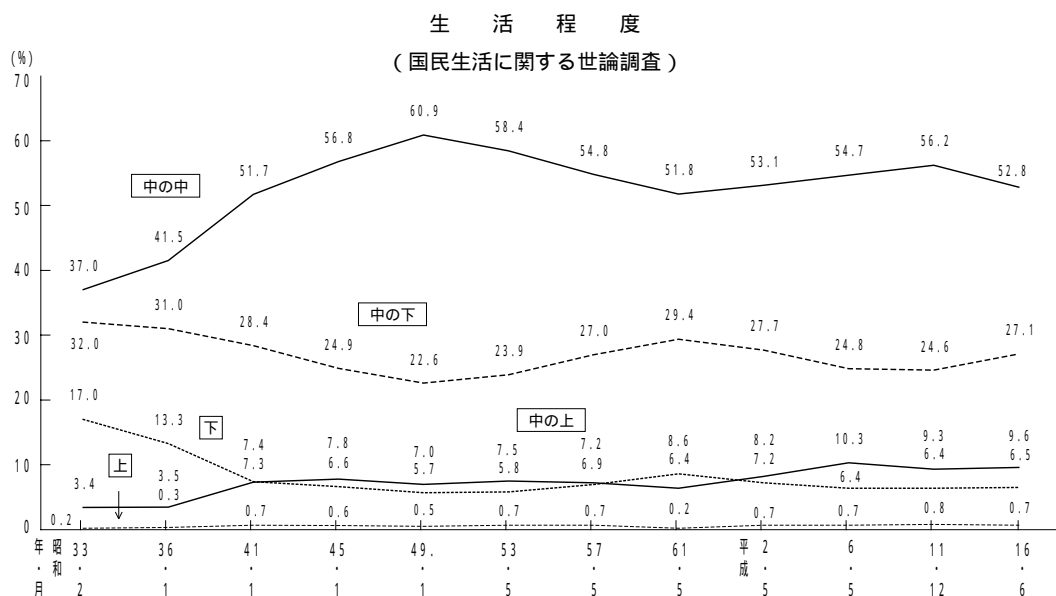
次回05年の調査がまつれる。

国民生活調査（旧総理府・内閣府）

「国民生活に関する世論調査」というタイトルで、全国20歳以上の10,000人を対象に、1958年以来毎年実施されている。国民生活全般に関わる質問構成になっているが、その中で一貫して帰属意識を聞く次の1問が組み込まれている。

問 [回答票] お宅の程度は、世間一般からみて、どうですか。この中から1つお答えください。

1	上	4	中の下
2	中の上	5	下
3	中の中	6	わからない



(注) 昭和37年1月調査及び昭和38年1月調査ではこの質問は行われていない。
昭和42年2月調査から昭和44年1月までは対象者が世帯主、家事担当者。(調査年は一部抜粋)

戦後13年目に始まった調査だが、当初「中の上」「中の中」「中の下」を合わせて7割強であったが、その15年後 安保時代をはさんで、高度経済成長を背景にオリンピックも成功させたころ、すなわちもはや戦後でなくなったころには9割に達した。

「中」のみが3段階になっている。

一億総中流論

SSM調査と国民生活調査のデータをもとに中流論が賑わいを見せた。9割が「中」という調査結果は当時の白書も肯定的に引用したが、これを端緒に識者の間で甲論乙駁の相を見せた。生活水準が向上し、ブルーカラーとホワイトカラーの差が小さくなり、都市化で生活様式が全国均質になった。さらに教育の機会均等、情報手段の普及で国民の生活意識に個人差がなくなった。文字通り完全平等化の社会が出現し、まさに一億総中流といえる、というのがマスメディアを中心にはやり言葉となった。経済的、政治的、教育的側面からも

それぞれの専門分野の識者が側面から論評した。しかし、「一億総」という言い方は、戦中・戦後に時として使われたが、戦後の一億総懺悔のごとく、的確に世相を表現しているが、必ずしも明るい意味に使われていない。一億総中流論も自己判断による「わたしは中くらい」から浮揚したものにすぎず、綿菓子のように一見おいしそうな話題にはなるが、歯ごたえがないともいえる。しっかりした観測値をもとに定義されたものでなく、まあそのあたりだろうという、人の軽薄な(帰属)意識によるものでしかないからである。だが一方で、軽薄そうに見えても、人の問いに対して直感的な回答が、最も正直に深層心理を表していることも確かだ。だから世論調査が成り立つともいえる。いずれにしても、マスメディアの過敏な反応と為政者にとっても中流意識の蔓延は政治がうまくいっているからという認識にもつながり、単なる中くらいという思いが中流意識論になり、さらに中流階級論に変身するなど、一億総中流論はしばらく

もてはやされた。

M女史の嘆き

広範に流布した中流論も、だがしかし、と首をかしげる国民も多くなり、やがて識者の反論から否定論まで頻繁にあらわれるようになる。識者同士の甲論乙駁から、世論調査の質問設定がおかしいから結果は当然そうなるというもの、そして調査結果を踏まえて中流意識に埋没する国民はおかしいと慨嘆する評論家など、当時の論評はさまざまである。なかでも戦後活躍した社会評論家M女史は、中流意識は自己中心の思想、と断じた発想がおもしろい。

女史は、ほとんどの国民が自分は中流に属すると意識するようになったが、この調査は都市生活者だけでなく農山漁村の過疎地居住者もふくまれている。日本には核の問題があり、物価、税金、為替の動きが心配であり、身近な問題として生命軽視の風潮がある。さらに教育の荒廃と家庭でのきずな弱体化を慨嘆し、国民は人並み意識に埋没しており、中流意識は自分さえよければという飽食時代の自己中心の思想で、それに安穩としていいのか、云々と。このような評論はえてして体制批判になりがちだが、教育者出身らしく広く国民に向けた強い啓蒙の言葉になっているのが興味深い。ただし、この発想も調査結果の単なる「中くらい」を中流意識という高踏な言葉に置き換えたところからスタートしており、多くの反中流意識論者がとった手法でもある。

中流の崩壊と再生

9割が中という調査結果に時代の変化がなくなれば、すなわち中流意識の飽和状況が続くことになれば、もはや中より上と下はわずか

であり、あえて中流を意識するのは疑問だという考えが生まれた。けだし当然のことで、中流を論じるのであれば、上流と下流が明確でなければならない。上流は邸宅に住み運転手付の自家用車を持ち、時にはゴルフや海外旅行を楽しむという客観条件で識別できた時代は終わり、邸宅の跡にも低所得者用のアパート群の跡にも等しく高層マンションが林立し誰でも入居出来るようになった。車もゴルフも海外旅行も国民等しく享受できるようになった。IT時代になりホワイトカラーとブルーカラーの差もなくなり、世の中の均質化が進み、階層を説明するには混沌として争点の見えない社会構造になった。新中間大衆というまぎらわしい造語もでき、識者はなんとか階層帰属意識を認知しようと試みたが必ずしもうまくいかなかった。

ところが、00年に入って総合月刊誌が「中流の崩壊」を特集すると、マスメディアを縦断した新たな中流論争が始まった。一方で80年代に入り、調査結果の中意識は「中の下」への移行がみられ、中意識にかげりもみえ始めていた。IT革命は社会的不平等を拡大しており、ITと株による一大成金は新たな資本家となり、その周辺でうろろうしているのは全て労働者で下層に属し、これまでの中間層は消えて2層化の方向に進みつつあるという極論も生まれた。これはこんにちにつながる話でもある。同時に別の総合誌が「新・階級社会ニッポン」を特集し「アメリカのように経営者が社員の何百倍もの年収を得るという一人勝の社会になったら、日本人のメンタリティからいって、日本は崩壊する。市場経済化の流れは止められないから、これからの日本はある程度の所得格差による階級社会を覚悟しなければならない。だからといって弱肉強食のアメリカ型社会を選択するわけではない」と、

専門家の意見でしめくくっている。日本人のメンタリティがどのように変動しているのかを見極めるには、緻密な世論調査によるしかない。

かくしてまっとうな階級社会論に始まった論調は、一億層中流および中流の飽和という階層論を経て中流の崩壊へと進み、再び格差の時代が到来したとして階級社会の再生擁護論が生まれることになる。中流論争は物語として繰り返されることになる。

最近の中流調査

現在も「中」意識の元データとなった生活程度の質問は、現在も毎年いくつかの機関の世論調査で実施されている。平成16年版「世論調査の現況」から採録してみると次のようになる。事例は5つあるが、参照のSSM調査を含め6つの調査の質問と回答肢は全て異なる。それぞれ別々の機関の調査であるから当然ともいえるが、「中」意識の聞き方と回答肢に問題がある、との指摘がしばしば識者からあり、それぞれの機関で創意工夫されたものと思われる。(数字はパーセント)

[国民生活調査] 全国 20 歳以上 10 000 人 面接 平 14 年 6 月 内閣府
問 (回答票) お宅の生活の程度は、世間一般からみて、どうですか。この中から 1 つお答えください。

上	中の上	中の中	中の下	下	わからない
0.1	9.7	56.1	24.0	6.5	3.0

[埼玉県政調査] (回答票) 埼玉県 20 歳以上 3 000 人 面接 平 14 年 7 月
問 お宅の現在の生活程度は、世間一般からみて、この中のどれに属すると思えますか。

上の上	上の下	中の中	中の下	下の上	下の下	わからない
0.2	1.5	39.1	38.2	9.2	4.8	7.0

[生活意識調査] 首都圏・阪神圏 15 ~ 69 歳 2 200 人 個別記入 平 14 年 5 月 博報堂
問 あなたの生活程度は、世間一般からみて、この中のどれに入ると思えますか。あてはまるものひとつに をつけてください。

上の上	上の下	中の上	中の中	中の下	下の上	下の下
0.2	2.1	21.5	40.8	23.9	9.4	2.2

[都民生活調査] 東京都 20 歳以上 3 000 人 面接 平 14 年 8 月
問 (回答票) お宅の暮らしは、このように分けるとどれにあたりますか。あなたの感じに一番近いもの 1 つだけ選んでください。

今の暮らしで十分余裕がある	3.8
” あればまあまあだ	48.2
今の暮らしではまだまだ余裕がない	37.6
” とてもやり切れない	7.9
わからない	2.4

[生活実態調査]全通組合員 20~60歳 22,000人 個別記入 平14年11月 全通
問 あなたの世帯の生活水準について、世間一般と比べてどの程度と感じていますか。

世間並みより高いと感じる	12
” やや高いと感じる	34
だいたい世間並みと感じる	453
世間並みよりやや低いと感じる	376
” はるかに低いと感じる	106
その他・無回答	19

<参考>

[SSM調査]全国20~69歳 5,800人 面接 1975年 SMM全国調査委員会
問 (リスト)かりに現在の日本の社会全体を、この表にかいてあるように、5つの層に分けるとすれば、あなた自身は、このどれに入るとお考えですか。

上	中の上	中の下	下の上	下の下
12	233	537	176	42

以上の事例を見ると、それぞれの実施機関で質問文と回答肢に工夫がなされており興味深い。調査の時期はSSM調査を除いて平成14年に行われているが、調査方法や対象者の年齢、回答の「わからない・DK」等を除外したものなどあるが、調査主体者の報告通りとした。単純に結果の比較はできないが、どう読むかは読者におまかせしたい。

いずれにしてもこのような基礎調査が、結果が面白いときも、面白くないときも、がまん強く継続されることを期待したい。空疎と思われる中流論争も何らかの国の方向を示唆してくれるはずだからである。

最後に中流意識の国際比較調査(国際価値観調査事務局)の結果を掲載する。13か国で実施されており、ここでは主な6か国について載せたが、どの国も似た結果になっている。いずれも90年前後の調査結果である。

	上	中の上	中の中	中の下	下
イタリア	22	125	705	108	30
フランス	18	108	612	189	63
ドイツ	09	159	537	215	34
イギリス	04	72	536	281	81
アメリカ	15	167	544	216	52
日本	11	109	536	269	54

[参考文献]

- 「中流」の構造(丸岡秀子)
- 社会階級と政治(今田高俊)
- 中流の崩壊(中央公論編集部)
- 階級社会日本(橋本健二)
- 平成16年版世論調査の現況(内閣府)

